

---

# 尽忠報国の志、芹沢鴨～白中の紅～

烏龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

尽忠報国の志、芹沢鴨〜白中の紅〜

### 【コード】

N9155G

### 【作者名】

鳥籠

### 【あらすじ】

極悪非道、酒乱、横暴……。芹沢鴨の生き様をつづる。注半分

以上、作者の創造によるものです。

## 其の一 浪士、暮る

尊皇攘夷は衰えが見えてきた幕府を討ち、天皇を敬い、外敵を排除しようとする思想である。この俺、下村嗣司も尊皇攘夷派の一人。しかし俺は、水戸藩の出。幕府と結びつきが強い水戸藩士だが、幕府の手先になんぞなりたくない。俺は尊皇攘夷の思想を強く持った。

そのために今は牢獄の中だ。処刑する人数が多くてなかなか順番が回って来ない。

……ここに入ってから、どのくらい過ぎたかな。

ふと、腕を見た。梅毒の症状である赤い点々がたくさん浮いている。それと同時に、体のあちこちも痛みだす。

「うう……」

酒さえあれば、こんな痛み……。

くそっ……！！

「俺を殺せえ！ 殺しやがれえっ！」

自棄になり怒鳴り、叫ぶ。しかし、殺してくれる者も居らず……。

「ぐっ……」

痛い……。

……俺はもう時期、死ぬんだな。

筆はなく、小指を噛みきる。その鮮血で辞世の句なるものを歌った。

雪霜に 色よく花の 魁けて 散りても後に 匂ふ梅が香

……我ながらいい歌じゃねえか。

笑みがこぼれる。

「井伊が斬られたらしいぞ！」

獄中の者がそう言っているのを耳にした。

……井伊直弼が殺されただと！？

それが真実かどうかは俺には分からない。だが、その噂を聞いてからか聞く前からか……最近、外が騒がしい。

そんな風にのん気に構えていた数日後。

牢獄に居た者たちが全て、外に出された。

……俺は、どこに行けばいい？

「芹沢先生」

平間重助が俺に話しかけてきた。

俺は牢から出たのを機に、名前を芹沢鴨に変えた。

ちなみに、平間重助は我が下村家の家臣である。

「ん？」

「將軍 徳川家茂様が上洛されるそうです。しかしながら京では、不逞浪士たちが横領や強請りをし、非常に治安が乱れております。

その警護をするために、浪士組というものを結成するために、隊士を募っていることを耳にしました」

「將軍の警護だと？」

「はい。あと、京の不逞浪士を取り締まる任もあるらしいです」

……刀が振れるのか。

牢から出て何日、何ヶ月と経っていたが、俺たちは何もすることがなく過ごしていた。

「面白そうじゃねえか！ 平間、俺は浪士組に入る！」

「先生にお供致します」

俺は同じ神道無念流の新見錦と平山五郎も同行させることにした。

## 其の二 浪士、業火

文久三年二月五日。

そこには大勢の男が集まっていた。数は二百ほどだという。

「芹沢先生、署名して来ました」

「ご苦労」

冬と言えども熱気がすごく、暑苦しい。俺は鉄扇で顔を仰ぐ。

「諸君！」

声のする方を見ると、浪士取扱役の鵜殿が立っていた。

「一組三十名ほどで七組作った。各組に三人の小頭を置き、残りの者は並隊士とする」

三番隊の小頭に俺と新見。平山と平間は六番隊の並隊士。そこには天然理心流の近藤勇、土方歳三、沖田総司なども居た。

そんな感じで隊の編成発表、道中の諸注意が終わった。

「では、弁当を肴に一杯やって下され」

酒や弁当が運ばれてくると、平山と平間が戻ってきた。

「芹沢先生、お酌しますよ」

「おう！ おめえらも呑め呑め」

がははははと豪快に笑い、大声で話した。酒もあるだけ呑んだ。

……また痛み始めた。

赤い点々は出ないようになっただが、体中が痛む。どんなに酒を呑んでも、豪快に笑ったり大声で話していても、痛みが紛れない。

「芹沢先生？ 大丈夫ですか？」

新見の一言で平間も平山も静かになった。

「痛みますか？」

三人の心配を振り払うように、歯を見せて笑い大声で言った。

「俺を誰だと思ってる！？ 芹沢鴨だぞ！ こんなところで死んでた

まるか！？ 酒を注げ！」

その言葉に三人が反応し、同時に三人で杯に酒を注ぎ、酒が溢れ

出した。三人は驚き互いの顔を見合わせ、笑った。  
俺もつられるように、大声で笑った。

二月八日。

浪士組は江戸を出て、京へ向かった。

二月十日。

「ふざけるなあ！ 貴様、俺を侮辱しているのか!？」

「いえ、決してそのようなことは……」

「では何故、我らの宿がないのだ!？」

宿割りの近藤が、俺たちの宿をとっていないだと？

……ふざけるな!

「すぐに手配致します故、お待ち下さい」

「よいよい。野宿をしろと近藤先生がおっしゃっているのならば、我らは野宿致す。しかしこの寒さのうえ、暖をとらせて頂く!」

俺は新見たちに薪を持ってこさせ、火をつけさせた。

消すように頼む近藤を差し置き暖にあたる。

……暖かい。

寒さのせいか今日は朝から節々が痛み、今夜は早めに床につこう  
と思っていた。だが宿がないため、床につくことすら出来ない。

「近藤さん!」

土方や沖田たちが騒ぎを聞き、駆けつけてきた。刀の柄に手を掛  
けている。

「みんな、止せ!」

「貴様ら何をしている!」

声の主は鵜殿であった。

「こんな所で問題を起こすような者は、江戸に帰れ!」  
「!」

俺は急いで火を消すように指示した。



### 其三 浪士、御預

幕府から東下命令が出たらしい。

それは清河八郎という奴の企てから来た命令だ。

清河は浪士組を自分のいいように使いたいと思ってる。そのために、東下させようと言うのだ。

「知るか!! 俺は京に残る!」

近藤たちも京に残るらしい。

しかし、俺たち4人で何をすることも出来ず……。

「芹沢先生」

平間が身を乗り出しながら言った。

「ここは近藤さんたちと共に行動したら如何でしょう?」

「んん……」

その手もあるが、近藤たちがどう出るかが問題だ。

「とりあえず酒だ」

「はい」

平山が席を外した。

俺たちは八木源之丞邸に世話になっている。近藤たちも八木邸に居るが、今は別の部屋に居る。

「新見」

「はい」

「近藤たちはどう出ると思う?」

「京に残ると思います」

襖が開いて、酒を取りに行った平山が戻ってきた。

「まあ、呑みながらゆっくり考えましょう」

そう言いながら、茶碗に酒を注いだ。

「そうだな」

みんな笑っていた。しかし俺は……笑えなかった。目の前がぼやけて、頭もぼーっとし始めた。

一杯になつた茶碗から、酒が少しずつこぼれてく。

「芹沢先生！」

「！」

平間の声で我に返った。

「すまんすまん」

笑つてごまかし、茶碗に残つた酒を呑み干した。平山に注ぐように言い、二杯、三杯と呑む。

「おめえらも呑め呑め」

話しなどそつちのけで酒を呑んだ。

……梅毒が進行してるのか。こんななんつちまつて。情けねえなあ。

ほろ酔いになつたころ、土方と沖田が訪ねてきた。

「これはこれは」

「芹沢先生。実はご相談がありました」

「相談？」

「はい。我らは京に残ります。ですが、芹沢先生のご意向も伺つたうえで松平容保様に市中警備と將軍家茂様上洛時の警護を願ひ出るため、嘆願書を出すつもりでいます」

「おお！ 名案だ！ それならば、我々も近藤さんたちと京に残るぞ」

土方たちは礼を言い去つていった。

嘆願書を出して間もなく会津藩から、以下十三名を当藩で預かると内諾がきた。密旨で清河を暗殺するようともあった。

「清河暗殺か」

清河たちが東下するまで三日しかない。

しかしこの三日のうちに機会がなく、清河暗殺は失敗に終わった。

## 其の四 浪士、遊戯

「おじちゃん、おじちゃん」

八木家の娘、たえが話しかけてきた。

「たえ殿。芹沢先生ですよ」

「よいよい。たえ、どうした？」

たえが顔いっぱいに笑った。

「また、絵描いて」

「いいぞ」

初めてたえがここへ来たとき、物珍しそうな目で俺たちを見ていた。平間が声をかけると、驚いて戻って行った。

だが、その次の日。紙や筆など持って来て、遊ぼと言ってきた。

それから時々、こうして遊びに来るようになった。

子供と遊んでいる時は、病の恐怖も、新選組でいる退屈さえも、全て忘れられる。

……こんな時が、いつまでも続けばいいなあ。

「たえ、出来たぞ」

たえはその絵を見て、驚いている。

「これ、たえ？」

「そうだ」

「わあ！ ありがとう！」

たえは部屋を出るなり、見て見て！ と大声をあげて走っていった。

俺たちは人数が増えて、組織を作れるようになった。その組織、新選組の一番上、筆頭局長に俺が居る。初めて聞いた時は驚いたが、異議はなかった。新見も局長、副長助勤に平山と平間が就いた。

「芹沢先生」

新見がきた。

「また菱屋の番頭か？」

「いえ、それが……美人のおなごでして……」

「何？」

「えっ、あっ、いえっ、一応、連れて参りました」

縁側の障子を開けると、女が一人立っていた。

「誰だ」

「菱屋のお梅どす」

確かに美人だが……。

「もう少し後にしてくれ」

「そないなこと言われてもなあ。わてらも困つとります」

……こいつは俺が怖くないのか？

「芹沢はんが何考えとるか、わてには分かりまへんが、物を貰うならそれなりの物払うてくれまへんと、こつちも困りますう」

「分かった分かった！ この次までに、なんとか致す」

意外な答えにお梅は驚いたような、嬉しいような顔をした。

「ほんまどすか！？ おおきに」

お梅は大人しく帰って行った。

「芹沢先生。大丈夫なんですか？」

「ん？ ひと月くらい来ないだろ」

俺は気楽に構えていた。

だが、あるうことか、その次の日にお梅は来た。

「……」

「……」

「用意してはりますよな？」

まさかの事態に、俺も平間も声が出ない。

「どないしました？」

「さすがに一日では、用意出来ぬ」

「昨日と言つてることが違いますう」

散々口論になったが、なんとかお梅を追い返した。

「あのお梅というおなご、なかなかの人ですな」

「俺もそう思う」  
意外な人間の登場に、俺は、呆気にとられた。

## 其の五 浪士、力士

俺は近くににいる平間に怒鳴った。

「酒を持って来い！」

「今日はもう、よしましろう」

「うるさい！ さっさと持って来い！」

最近、自分の感情を抑制するのが難しくなってきた。体中のあちこちが腫れあがり、平間たちに対しても暴言を吐くことが多くなってきた。

……こんな病気にさえならなければー。

死が近づいていることを実感する。

「芹沢先生。持って来ました」

俺は徳利を受け取り、杯にいっぱい注いだ。

その杯を平間の前に出した。

「呑め呑め」

俺は杯に注がず、徳利の酒を呑み干した。

「先生……」

それを見た平間は呆気にとられている。

「平間」

驚いたように平間が返事をする。

「はいっ」

「俺は……死ぬのか？」

平間は真剣な眼差しで俺を見た。

そして微笑み、

「そんなこと言うなんて、先生らしくないですね」

杯の酒を呑んでから言った。

「俺を誰だと思ってる！？ 芹沢鴨だぞ！！ 死んでたまるか！

って、言ってたじゃないですか」

平間の顔が歪んだ。その顔が笑っているようにも泣いているように

にも見える。

「おお！ そうだな！ 俺は尽忠報国の志、芹沢鴨だぞ！！」

近くにあった鉄扇で煽んだ空気を仰ぐ。

「新見たちも呼べ！ 呑むぞ！！」

いつかと同じように豪快に笑ってみせた。

文久三年六月二日。

大阪町奉行から不逞浪士取締りの依頼があつたため、大阪へ出向いた。顔触れは俺、平山五郎、平間重助、近藤勇、山南敬助、沖田総司、永倉新八、斎藤一、島田魁の九人。

翌三日。

二人の不逞浪士を捕縛して、身柄を大阪町奉行に引き渡した。

この日の夕方。

心地よい風が吹いていた。

近藤を除いた八人は小舟で淀川に乗り出した。

「いい風だ」

「はい」

夕陽で川が橙色の波紋を描いている。

「おい、大丈夫か！？」

後ろから声がし、振り返って見ると、斎藤が腹を抱えてうずくまっていた。

「痛い……」

小舟を近くの岸につけてもらい、数人で斎藤を抱えながら降りた。近くには休ませるところも見当たらない。

「芹沢先生」

平山が話しかけてきた。

「ん？」

「三町ほど行くと住吉屋があるそうです。そこで斎藤さんを休ませ  
て、我々は一杯やりましょう」

「いいなあ」

俺たちは住吉屋へ向かった。

二町半ほど歩くと難波小橋にさしかかった。斎藤を介抱しながらゆっくり歩いていくと、前から力士がひとり、歩いてきた。

「脇へ寄れ」

俺は立ち止まり言った。

「そつちこそ寄れ」

大阪にまで、俺の噂は流れてないらしい。脅えもせず、俺を見下ろしている。

「病人が居る。寄れ」

「知らん」

「なに！！」

手が柄を掴み、刀を抜きざま斬りつけた。

力士は絶叫をあげ、斬られた肩をおさえながら脇でうずくまった。「命があるだけ有り難いと思え」

難波小橋を渡りきり、蜷橋にさしかかった。そこでも力士が道を譲らないので、同じ目に合わせてやった。

住吉屋に着き、斎藤を休ませ吞んでいると、二十数名の力士が敵とばかりに丸太などを手にして押し寄せてきた。

斎藤以外の七人で外へ飛び出した。

力士と武士の喧嘩。

物珍しさにたくさんの人垣が出来ていた。しばらくすると力士たちは逃げていった。

## 其の六 浪士、焼討

力士との事件のあと、近藤に散々怒られた。その後、近藤の素早い処置のため、大事にならず収まった。

しかし、この一件から近藤たちが力士たちに媚びを売るようになった。俺はそれが気に喰わなかった。

……いい気になりやがって。

俺はお梅の頬を撫でた。お梅はくすぐったそうにしながら、杯に酒を注いだ。俺はそれを、一気に呑み干す。

「芹沢はん？ どないしました？」

俺はお梅見た。

……いつまでこいつの顔を見れるだろうか。

無意識のうちにお梅を抱き寄せていた。

お梅の頬が朱に染まる。

「芹沢先生」

平山の声だった。

お梅の顔が真っ赤になり、俺から離れた。

「何だ」

「大和屋庄兵衛が不逞浪士たちに一万両もの金を用意したらしいです」

「一万両ですか！？」

俺もお梅も啞然となった。

「浪士どもに金を出すか、我々には金を出せないと言つのか！！！」

俺の大声にお梅は驚いた顔をした。そして、平間と新見が入ってきた。

「平間、新見、何人が集める！ 明日の明朝、大和屋へ行く」

「はい」

二人は早速と部屋から出た。

「芹沢先生。明日はこの近くで相撲興行があります。また次の日にしたらいかがです?」

「そつどすえ?」

「知らん! 俺はなあ、あいつらに媚びを売っている近藤たちが気に喰わんのだ! 何故俺が、相撲取りの世話をしなければならんのだ? そんなのやりたい奴がやればいいんだ!」

俺はあるだけの酒を呑んだ。

翌日の明朝。

俺たちは大和屋が店を開いて間もない頃に着いた。庄兵衛は居るはず。だが、番頭は主が居ないと言つ。

「そこもとの主、庄兵衛は浪士どもには金を出すが、我らには出さんと言つのか?」

「それは……。庄兵衛はんが居ませんさかい……。わてに聞かれはりましても……」

番頭は青ざめた顔で語尾を濁した。

「主は、夕暮れには帰つて来よう」

「まあ……」

「ではその時に来る。とりあえず二百両ほど用意しておけ」

そつは言つたものの、夕暮れまで時間がある。

俺は一人、梅毒からの、死からの恐怖を逃れるため、ひたすら酒を呑んだ。

「芹沢先生。起きてください。陽が沈みますよ」

知らずに寝ていた俺を起こしたのは、平間だった。

外は朱色を帯びている。

「大和屋へ行きましょう」

「……あ!」

忘れていた。

数名の隊士に銃を持たせ、足早に大和屋へと向かった。

「番頭、庄兵衛は戻ってるだろうな？」

「それが……まだでして……」

数名を土蔵のある裏へ回した。

「では、二百両はどうなっている？」

「わたのような者に言われましても……」

「もうよい。庄兵衛の首より、もっといいものを見せてくれるわ！」

青ざめ、怯えている番頭を差し置いて俺は裏へ回った。

「火を点ける！ 全てを燃やしてしまえ！」

隊士たちは土蔵に火を放ったり、土蔵の中の品物を燃やしたりした。番頭はどうしようもなく突っ立っている。

野次馬も大勢集まってきた。

俺は燃やされていない土蔵の上に立ち、大声で叫んだ。

「我は尽忠報国の志、芹沢鴨であるぞお！ 新選組筆頭局長であり、神道無念流免許皆伝をした！ 芹沢鴨だぞお！！」

死ぬ前に、俺の存在を示しておきたかった。生きてることを確認したかった。

誰かに、覚えていて欲しかった。

## 其の七 浪士、切腹

俺たちはいつものように、昼間から酒を呑んでいた。

「どんだん酒を持ってこい！ 全部呑んでやる！」

笑った瞬間、頭の中がまっ白になった。それを堪え、一層大きな声で笑う。

目の前が真っ暗だ。

「芹沢先生！ もうよして下さい。死んじゃいますよ」

「そうですよ。今日はこのくらいにして下さい！」

俺の手から徳利ごと酒が奪われた。

……酒がないと、俺は死ぬ。酒があるから何もかも忘れられる。

「返しやがれ！」

怒鳴ったとたん、意識を失った。

だが、どこか遠くで声が聞こえる。

「！」

何かが上から降ってきたのに驚き、顔を羽織りで拭う。冷たくもない生暖かい液体が、顔中にかかっていた。

……酒だ！！

「芹沢先生！ よかった……」

「芹沢はん、大丈夫？」

平間、平山、新見、お梅が俺を取り囲むように座り、心配そうな眼差しを向ける。

俺は何事もなかったかのように起き上がった。

「おめえら、どうした？」

へらへらと笑って見せる。

お梅が泣きそうな顔で俺に抱きついてきた。他の三人も安堵の表情を浮かべている。

そこに、聞き覚えのある足音が聞こえてきた。

「芹沢先生はおりますか？」

「土方君か」

土方は失礼します、と言い、入ってきた。

「近藤さんが久々にみんなで一杯やるうと言っております」

「んん……」

また失神するようなことがあれば、何が起こるのか分からない。俺はお梅に目をやった。お梅は俺と目が合うと、目を逸らした。

……一人にさせるわけにいかないな。

「俺はお梅と呑む。おめえら三人で呑んで来い」

「芹沢先生、来ないのでですか！？」

俺が酒の話しに乗らなかつたことに、土方は相当驚いている。

「ああ、行かん」

「では、三人で行くか」

新見が言うと他の二人は頷き、土方の後について行った。

「芹沢はん、行かなくてよかつたんどす？」

「ああ。今夜はお梅と二人きりで呑みたい気分なんだ」

それから暫くは、他愛のない世間話をしていた。

だが、楽しくなく、俺はつい、ぼーっとしてしまった。

お梅はふてくされた顔をして、俺の腕にもたれ掛かってきた。不意に、腕にかかった羽織りがめくれる。

俺の白くて太い腕に、赤い点々がいっぱい出来ていた。お梅はそれを見て何故か、目を輝かせていた。

「……綺麗どす」

そう言つて俺の腕を撫でる。

「そうか？」

杯の酒を呑みながら聞き返す。

「雪の中に咲く梅みとつに、綺麗どすう」

お梅に言われてもう一度、腕を見る。

確かに、そんな風にも見える。

「俺が生きてる間に、よく見とけよ。死んじまったら見せられんからなあ」

苦笑いをしながらお梅を見た。お梅は怒ったような泣いているような顔をしていた。

俺はお梅を抱き寄せた。そうしなければ、自分が生きているのかさえ分からなくなってしまう。

「芹沢先生！」

大声と共に二人ほどの走って来る音が聞こえる。お梅は驚いて、俺から離れた。

「芹沢先生！」

障子が開き、平間と平山が顔を覗かせた。相当呑んだのか、あるいは長い距離を走って来たのか、顔が真っ赤になっている。

「どうした？」

「新見が……切腹しました」

「何!？」

平山の話によると、酒を呑み過ぎて泥酔した新見が、その勢いで矢島藤十郎から二十両借りたことを言ってしまったらしい。

局中法度には「勝手に金策いたすべからず」とある。これに背いたら切腹を言い渡される。

「新見が……」

俺は大事な片腕を失った。

## 其の八 浪士、肅正

「芹沢さん」

珍しく近藤が姿を見せた。

「ん？」

「明日、角屋を貸し切りにして、大勢の隊士を連れて呑みに行くつもりです。芹沢さんもどうですか？ もちろん、平間君や平山君も一緒に」

新見が近藤たちに切腹させられた気がし、その時から、近藤たちを警戒していた。だが、近藤は多くの隊士と平山、平間も連れて行くと言っている。

……大勢の隊士の前で、俺を斬ることはないだろう。

それよりも角屋を貸し切って呑むと言う誘惑に、俺は耐えられなかった。

俺は、行くと返事した。

そして、翌八月十六日の朝。

外は曇っており、小雨も降っていた。

「芹沢先生」

平間と平山が来た。

「ん？」

「用心のため、我らはずっと、お側に居りまする」

「分かった。しかし、もしもの時は……逃げろ」

「はい」

「よし、酒を持ってこい」

殺される不安を取り除くために、軽く呑もうと思った。

「先生、午後に呑みに行くじゃないですか」

「……あ！」

忘れていた。

「先生。病気の方も心配です。今日はあまり呑まないようにして下さいよ」

平間たちの心配に耳を貸さず、俺は横になった。

午後になり、平間たちを連れて角屋へ向かった。

角屋には予想以上に多くの隊士が集まっていた。

「おお！ 凄い数だなあ」

……これならば、近藤たちも滅多なことは出来まい。

俺は安心して、勧められるがままに呑んだ。

隊士たちや近藤たちも酌をしに来た。しかし、角屋の遊女は酌をしに来ても、すぐに他の隊士のところへ行ってしまう。

……俺は、お梅がいい。

辺りを見回したが、お梅が見当たらない。

それもそのはず、お梅は菱屋に居る。だがここは、角屋だ。居るわけがない。

「平間！ お梅を呼べ！」

俺は隣に居る平間に言った。平間は驚いたようにこっちを見て、小声で言った。

「先生、ここは角屋です。お梅さんと呼ぶのはまずいですよ」

俺は平間の持っている徳利を奪い、その酒を口に含み、平間にかけた。

「俺が呼べと言ってるんだ！ さっさと連れてこい！」

「芹沢先生」

平山が耳打ちした。

「お梅さんを八木邸へ呼びましょう。そして後は、我々だけでゆっくり呑むことにしましょう」

平山も平間も何か訴えているようだった。

「よし！ 俺は帰る！ 帰って、お梅と呑む！」

そう大声で言うと、近藤たちは籠を呼んで見送った。

籠には土方と山南が、芹沢先生が襲われては困ると言い、八木邸

までついて来た。

平間はお梅たちを呼びに行った。

平間の妾は糸里。平山の妾は小栄である。

籠をゆっくり走らせた。

八木邸に着いた時には七時ころになっていたのだろう。辺りは薄暗く、相変わらず雨が降っている。

八木邸の前には平間と三人の女が待っていた。

土方と山南は角屋へ戻ったらしい。もう既に居なかった。

八木邸に入り酒を呑んだ俺は、お梅を連れて奥の座敷へ行った。

誰も居ない奥の座敷は、とても寒かった。体が微かに震えているのが分かる。

「芹沢はん？ 寒いんどす？」

そう聞きながら、布団を掛けてくれた。

俺はその中に縮こまった。お梅が隙間からもぞもぞと入ってきた。「芹沢はん？ 大丈夫？」

俺はお梅の着物を剥ぎ取った。そして、自分が着ているものも脱ぎ捨て、お梅を抱き寄せた。

お梅の体温が、直接感じられる。

俺はそのまま眠ってしまったらしい。

不気味な夢を見た。

真っ白い雪の中に、数本の梅の木があった。その梅の花は綺麗な深紅で、辺り一面に咲き誇っている。

俺は一輪の梅に触れた。梅は深紅の液体になり、雪の上にぼたぼた落ちてしまった。

「無様だな」

数人の笑い声が聞こえてきた。

ふと、辺りを見るといつの間にか真っ暗な所に居た。周りには誰も居らず、笑い声だけが響く。

何かの気配がし、そちらを向いた。

暗いので、目を凝らす。

白い物に刀が刺さり赤くなっている。

……血だ！

俺は白い物をよく見た。刀が刺さって血まみれになっているのは

……。

……俺！？

「ぎゃあああああ！」

どこかから聞こえた悲痛な叫び声に驚き、目を覚ました。それは、平山の声だった。

俺は近くにあった刀を持ち、構えた。

襖を開け放ち、勢いよく入ってきた男は四、五人だった。

……勝ち目がない。

振りかぶってきた刀を受け止め跳ね返す。あまりの強さに耐えられず、そいつは後ろに倒れた。

そいつを飛び越えて、別の奴が斬りかかって来た。俺はそれを交わし反転した。

が、近くにあった文机に足を引っ掛け、前につんのめる状態で転んだ。

そこで振り返り、刀で防ぐ間もなく、何かが俺を貫通した。

……刺されたのか？

その瞬間、猛烈な痛みが体の中を駆け巡る。俺は耐えきれず、絶叫をあげた。

体の力が抜けるのが感じられる。

俺が最後に見たのは、一面の雪の中に咲く、一輪の深紅の梅だった。

## 其の八 浪士、肅正（後書き）

参考文献：\* Wikipedia\* \* 沖田総司 壬生狼 作：鳥羽亮\* 参考文献と言っても、ほとんど壬生狼のパクリみたいになってしまいました。すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9155g/>

---

尽忠報国の志、芹沢鴨～白中の紅～

2010年10月8日15時22分発行